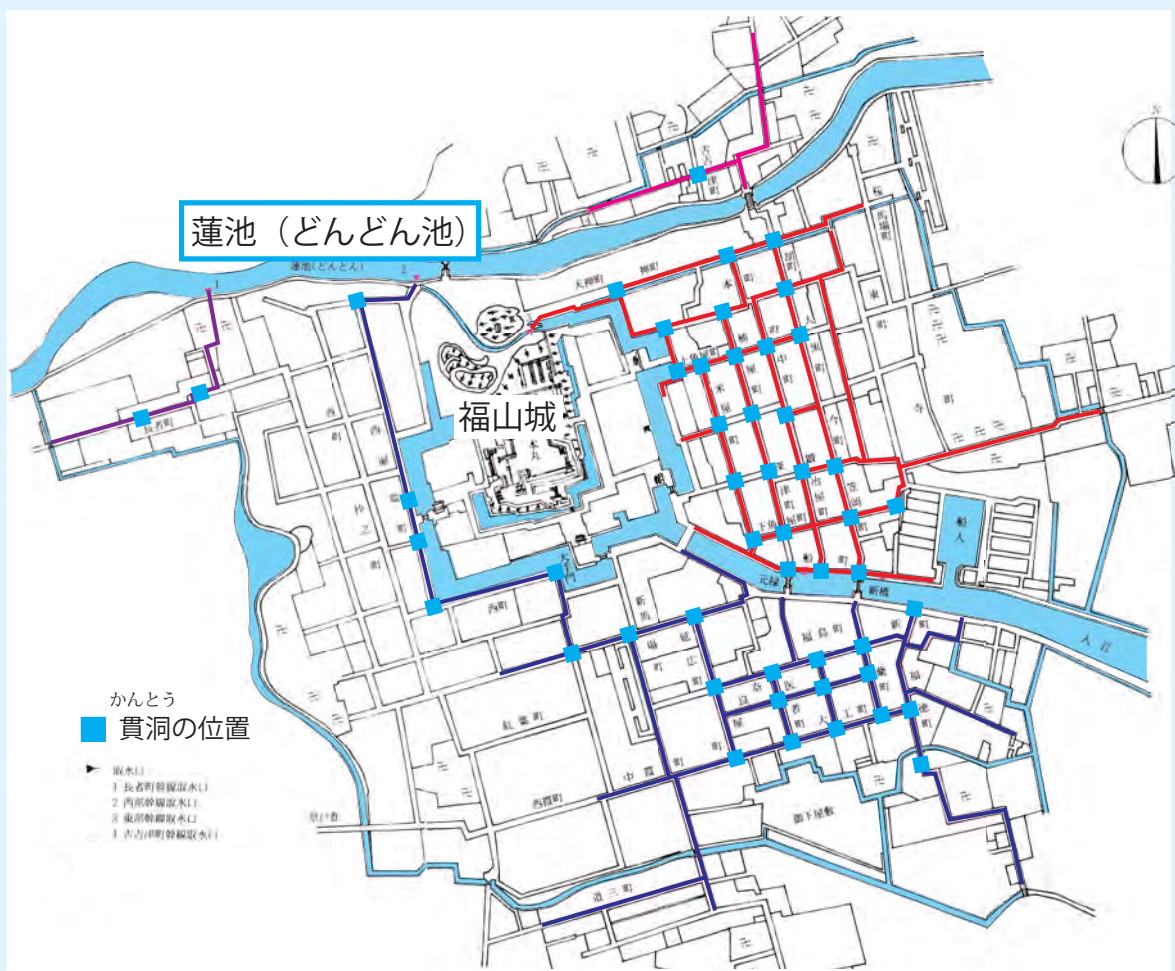


7. 福山水道（広島県）

あしだ

芦田川の河口の低地に町が造られた福山では、やはり飲用水の確保が問題となりました。現在の福山城周辺や南側に広がる市街地と水田地帯は、そのほとんどが江戸時代前半に行われた治水・干拓事業によって形成されたもので、江戸時代以前の福山は小さな集落にすぎませんでした。江戸時代初頭に福山城下町が整備されると同時に、「福山上水」が福山藩主であった水野勝成によって元和8（1622）年に敷設されました。

福山水道は福山城の西を流れる芦田川を水源としています。芦田川から東へ延びる水路状の池「蓮池（^{はすいけ}どんどん池）」へ導水された水は、道路に設置された石垣樋によって城下町へ配水されています。当初はこの石垣樋は開渠で、この配水路から直接水を汲んでいましたが、通行の邪魔になったりゴミが入ったりすることが多くなったために暗渠となり、樋による各家への給水が行われるようになったといわれています。



▲福山上水の上水道網（赤穂市立歴史博 1997 を改変）

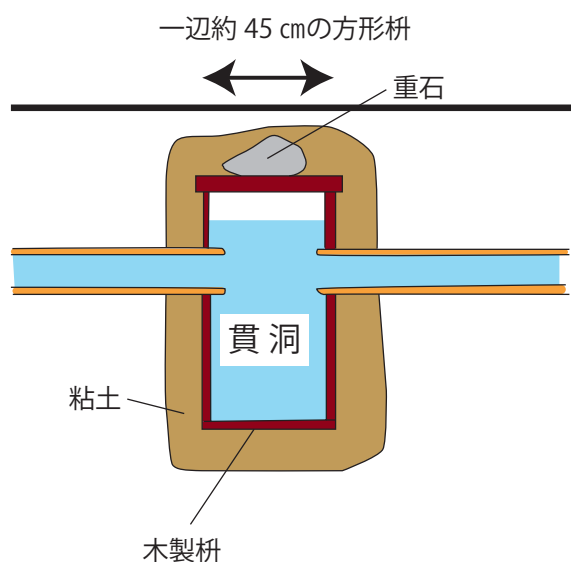
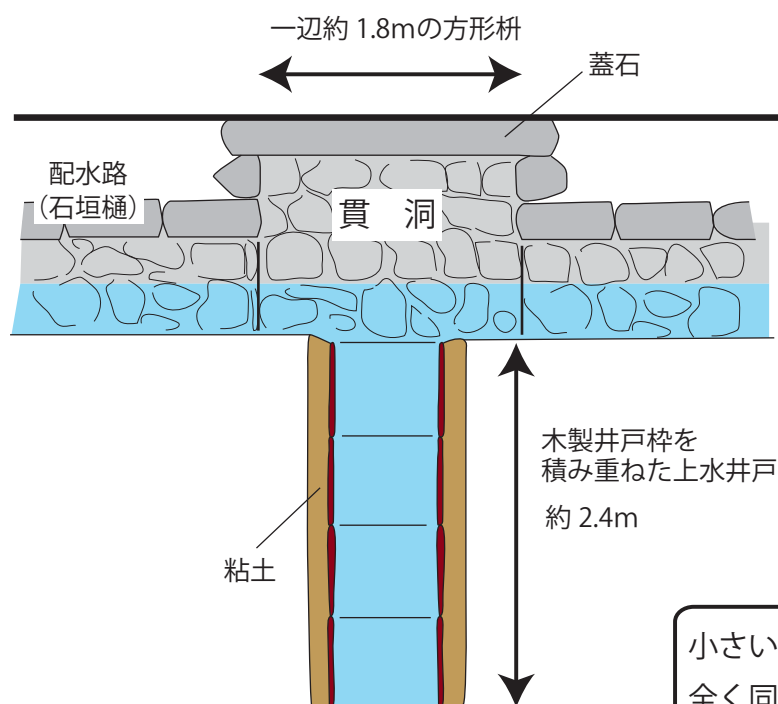
かんとう

配水路には「貫洞」とよばれる方形の井戸状の枡が設置されていました。

その用途や構造は赤穂上水道における「間枡」とほぼ同様のもので、上水道の分岐・土砂の沈殿などの浄化を目的としていました。また、水不足のために各家に水が行き渡らなくなったときには貫洞の蓋を開けて、共用の井戸として利用することもあったようです。

給水路には竹樋・土樋が主に用いられたようで、各家にあった上水井戸へ給水されています。幕末以降の上水井戸は、石製や素焼の井戸枡を積み重ねたものが多かったようです。発掘調査はあまり実施されていませんが、明治時代に設置された福山上水の施設が調査されており、明治時代後半まで上水が使用されていたことが分かりました。

福山市では大正 14 (1925) 年に近代的な上水道が敷設されますが、それまで江戸時代の上水道が利用され続けました。



小さい方の貫洞は、赤穂上水道の間枡と全く同じ形状うにゅ！
でも大きな方の貫洞は赤穂上水ではみられないもので、福山水道独自のものみたい。



▲貫洞の構造 (福山市水道局 1968 をもとに作成)